

〔14〕 ジョルジュ・ドンの『ニジンスキー・神の道化』

1991年9月6日 東京新聞 夕刊

モーリス・ベジヤール構成でジョルジュ・ドンが踊る『ニジンスキー・神の道化』を、私は昨年の暮にパリで観て、そしてまたこの八月、東京で観たのだが、東京公演のほうが熱の入った良い舞台だった。パリでは訛りの強いフランス語だった台詞が、初演以来のスペイン語になったせいもあるだろうが、客席の反応も質が高い。

● 狂気の内側へ

舞踊としてはいっぷう変わった作品で、ニジンスキーの手記の断章をドンと、共演の女優シレー・リンコフスキーが代わる代わる読み上げ、狂気の人舞踊家の内面の苦悩を浮き彫りにしていく。母や娘への思い、ニジンスキーを世界の寵児に育て上げたデイアグレフに対する愛憎ともごもの激情、結婚にまつわる迷い、そして戦争という破壊への怒りと絶望……。ある時は神との一体化を感じるほどに高められる芸術家の自負と、踊らされる道化にすぎないという自己卑下とが表裏一体となって、最も原初的でありながらついには最も意識的、技巧的なものともなる踊りという営みの、その本質について、めくるめくような思いを誘う。

字幕つきの台詞のあいだには、ベジヤール舞踊の名品である『アダージェット』や、ニジンスキーが短い舞踊生活の最後に演じたという創作の過程そのものを見せるパフォーマンス（床

[14] ジョルジュ・ドンの『ニジンスキー・神の道化』

1991年9月6日 東京新聞 夕刊

に敷いた布の十字架の上で、長時間みじろぎもしなかったと伝えられる)など、舞踊史に残る話題作が幾つも再現されるのだが、面白いことに、あるいは当然のことに、それらの踊りはいずれもニジンスキー、ベジャール、ドンという三人の舞踊芸術家を重ね合わせたものとして見えてくるのだ。

そして、かつては輝きを発しつつも、しかし完成された外側でしかなかったそれらの踊りは、今あらたに人生と芸術に関する深い省察によって切断され、色どられて、内面的なニュアンスにみちみちたものとして再生する。

バレエに詳しい人が見れば、はっとするところ、考え込んでしまうところ、いろいろあるけれども、私はむしろ今まで舞踊にあまり関心なかった人に観てもらいたいと思う。身体で表現した文学という趣でもあるし、それにリンクダンスがとてもいいのだ。ニジンスキーをめぐる何人もの役を前じるのだが、途中ふつと我にかえって女優自身の素顔を見せ、それからまた陽気に役柄にもどっていくところなど、さすがチェーホフからブレヒトまでこなすというだけあって、なまじの芝居をはるかに越える心憎さだった。